

前号に引き続き「滄浪亭」の“滄浪”から始めたい。蘇州市の四大名園の一つである滄浪亭の名称の出典は、「楚辞」の中にある屈原の「漁夫」からだで紹介した。この「漁夫」は、前号で書いたように屈原が讒言に遭い江南の地に追いやられ、行くあてもなくさまよっていた時に会った漁師との問答である。この時のやり取りを日本語で再現すると・・・。

一見る影もないほどやつれ果てた屈原に出会った
漁師は、この人物を高官の地位にあった屈原と
わかり彼に呼びかけた。

〈漁師〉あなたは三閭太夫様ではありませぬか。なぜこのような処においでですか？

〈屈原〉世の中はすべて濁っている中で私独りが澄んでいる。人々すべて酔っている中で、私独りが醒めている。それゆえ追放されたのだ。

〈漁師〉聖人は物事に拘わらず、世と共に移り変わると申します。人々がすべて濁っているならば、なぜご自分も一緒に泥をかき乱し、波を立てようとなさいませぬか。人々がみな酔っているならば、なぜご自分も(酒糟を喰らい)糟汁まで啜ろうとなさいませぬか。なぜまた深刻に悩み、高尚に振る舞って自ら追放を招くようなことをなさったのですか。

〈屈原〉「髪を洗ったばかりの者は、必ず冠のチリを払ってから被り、湯浴みしたばかりの者は、必ず衣服をふるってから着るものだ」と聞く。どうして

この清らかな身に汚らしいものを受けられようか。たとえこの湘水の流れに身を投げて魚の餌食となろうとも、どうして純白の身を世俗のチリにまみれさせることができようか。

一漁師はにっこりと笑い、櫓を操り次のように歌いながら漕ぎ去った。

〈漁師〉滄浪の水が澄んでいるなら冠の紐を洗えばいい。滄浪の水が濁っているなら自分の足を洗えばいい。

以上であるが、最後の漁師の言葉を原文で綴ると、

滄浪之水清兮

可以濯吾纓(冠のひも)

滄浪之水濁兮

可以濯吾足

となる。伊藤博文はここから引用し、「滄浪閣」と命名したわけである。この故事から、「何事も自然の成り行きに任せて身を処するべきだ」ということが読み取れよう。明治維新後の国内政治体制がまだ未完成の状況で、博文は確固たる信念を持ちながらも多くの意見を受け入れ柔軟に事に当たるべきだ—との気持ちが汲みとれるのではないのか。その気持ちが別荘の名称に反映されているのではなかろうか。

ところで屈原は楚のために粉骨砕身したのであるが、最終的に絶望し汨羅の淵に身を投じたと言われている。端午の節句に食べる粽や龍船競争がこの故事を由来としているのはご承知の通りである。汨羅の淵であるが、私は岩陰の水が深く淀んでいるような、あるいは身投げから連想すると滝壺のようなイメージを持っていた。しかし、2013年12月町田市在住の平島克子さんの絵画展が町田市民ホールで開催されていたが、平島さんが描かれた絵を見ると私の想像と全く異なる汨羅の情景が描かれていたのである。お尋ねしたところ実際にこの地に行かれて描かれたとお話された。その絵はゆったりと流れる普通の川であった。なお、「汨羅」は湖南省に



顔真卿の書といわれる闔閭の墓

ある汨羅江の下流にある街である。汨羅江は湖南省北東部を西流し、最終的に洞庭湖（中国で3番目に広い湖）に流れ込む湘江の下流域に流れ込む河川である。

さて、蘇州市の観光には市内から北西に5kmのところにある「虎丘」を外すわけにはいかない。虎丘とは、越王・勾踐との戦いに敗れた呉王・闔閭（生年不詳～BC.496年）が葬られた小高い丘である（このあたりの事情は198号を参照ください）。当初この丘は海湧山と言われていたが、葬

儀の三日後、闔閭の陵墓に白い虎が現れその墓を守ったとされる言い伝えにより虎丘と改名されたとか。丘の頂上には「雲巖寺塔」がどっしりとかつ気高く聳えている。西暦961年創建（宋代）の蘇州最古の塔である。この塔は実は今から約400年前から地盤沈下し始め、徐々に傾いてきたのである。ガイドブックにより多少異なっているがおよそ4度近く傾いていて肉眼ではっきりとわかる。斜塔といえばイタリアのピサの斜塔が有名であるが、雲巖寺塔は東洋の斜塔と言われているようだ。八角形の七重の塔でレンガ造りである。千年以上の歳月を感じさせる佇まいである。高さは47メートルあり遠くからでもよく見える。ちなみにピサの斜塔は55メートルで傾斜は3.99度だそうだが（最大で5.5度傾いていたそうであるが工事により現在の傾斜に戻った）。

頂上からすこし降りたところにこじんまりした池がある。「剣池」という。そこが闔閭の墓である。池のそばに大きな石があり、そこにタテ書きで大きく楷書で「虎丘剣池」と彫ってあり赤く塗られている。唐代の書家・顔真卿（709年～785年）の書である。



雲巖寺塔の前で

彼は書聖と言われる王羲之（303年～316年）の流麗な書法に異を唱え、力強い楷書体を提唱した人物である。この剣池という名称であるが闔閭の埋葬時に、息子の夫差が剣を愛した父のために三千もの宝剣を一緒に埋めたところからこの名がつけられたという。なぜその地が池になったかということであるが、その点については後の始皇帝（BC.259年～BC.210年）や三国時代の呉の孫権（182年～252年）が、その宝剣を捜して掘った跡が池になったともいわ

れている。この丘は他にも見どころのあるところが多く、これから行かれる方は事前に調べて行かれることをお勧めしたい。

それでは息子の夫差はどこに埋葬されたのだろうか。臥薪嘗胆のところで書いたように勾踐はBC.473年、ついに呉の首都・姑蘇城（姑蘇は蘇州の当時の名）を陥落させた。夫差の首を刎ねるべきと強く進言する者がいたが、勾踐は夫差が以前自分の命を助けてくれたことから、甬東の島（現在の浙江省・舟山諸島）に流し、そこで余生を過ごすように情けをかけたのである。夫差も勾踐も根はやさしい男であったのであろうか。しかし夫差は勾踐の厚情を丁重に断り、「伍子胥に合わせる顔がない」と自らの首を刎ねさせた（BC.473年）という。勾踐は夫差を手厚く葬ったそうだが。その場所をいろいろ調べたがよくわからない。1983年に湖北省の江陵県で夫差の矛が出土したそうであるが、そのあたりを陵墓とみるには江陵県は蘇州からあまりにも遠すぎる。私はやはり虎丘の父の墓に合葬してやっと思いたい。いまから2500年も前の、遠い遠い出来事である。

東洋のベニスと言われ、水の都・蘇州市については、4回にわたり寄稿してきたが締めくくるに当たり懐かしの歌を登場させたい。言うまでもなく「蘇州夜曲」である。昭和15年(1940年)に作られたというから、今から75年も前の歌である。作詞は西条八十、作曲は服部良一の名コンビである。西条八十(1892年～1970年)48歳の時の歌詞であるが、実際に彼は蘇州に行ったことがあってこの詞を書いたのであろうか？ または童謡「月の砂漠」のように自分のイメージで書き上げたのであろうか(月の砂漠の記念碑は九十九里浜の海岸にある)。「蘇州夜曲」は李香蘭(山口淑子)の歌唱を前提に作曲され、彼女が主演の映画「支那の夜」の劇中歌として発表された。「支那の夜」では、李香蘭は昭和史を飾る美男俳優として一世を風靡した長谷川一男と共演した。この映画では、彼女は中国人の女性として出演し、長谷川一夫が扮する日本人の貨物船船員と恋に落ちるストーリーとなっている。私は子供のころ、李香蘭ではなく渡辺はま子



蘇州駅

が甘く切なくこの歌を歌っていたのをはっきりと記憶している。今思い返せば蘇州夜曲が私に中国という国に興味を持たせ、寒山寺のイメージを作り上げさせたのかもしれない。李香蘭は昨年9月7日に惜しまれながらこの世を去った。享年94歳であった。李香蘭の冥福を祈りながら、蘇州に思いを馳せたい。

(この項おわり)